

東京低地北部毛長川周辺の 地形環境と遺跡立地

伊興遺跡を取り巻く環境

The Geomorphological Environment and the Location of
Archaeological Sites in the Vicinity of the Kenaga
River in the Northern Tokyo Lowlands

村石眞澄

はじめに

- ① 微地形分類
- ② 地形形成概観
- ③ 環境と人間活動

まとめ

[論文要旨]

伊興遺跡をはじめとする足立区北部の発掘調査に携わる中で、微地形分類をおこなった。微地形分類は空中写真を判読し、比高差・地表の含水状態・土地利用を基準として分類を行い、発掘調査での土層堆積の観察所見や旧版の地形図を参照した。こうした微地形分類により、埋没していた古地形を明らかにすることができた。そこでこの埋没古地形の変遷を明らかにするため、花粉化石や珪藻化石などの自然科学分析から植生や堆積環境の検討を行った。

そして自然環境を踏まえた上で、発掘調査によって発見された遺構や遺物、中世や近世の文献資料などを総合的に概観し、次のように伊興遺跡を中心とする毛長川周辺の自然環境と人間活動の変遷過程を次の五つの段階に捉え、それぞれの景観印象図を作成した。

- 1 縄文海進のピーク時にはこの地域では大半の土地が海中に没したが、その後徐々に干潟ができ陸化が進んだ時期 [縄文時代後期～晩期前半]。一時的な利用で土器を残した。
- 2 毛長川が古利根川・古荒川の本流となり、大きな河道や微高地が形成された時期 [縄文時代晩期後半～弥生時代]。人間活動の痕跡は希薄である。
- 3 古利根川・古荒川が東遷し、毛長川は大河でなくなった時期 [弥生時代終末期～古墳時代]。本格的に居住が行われるようになる。伊興遺跡は特異な祭祀遺跡として大いに発展する。
- 4 毛長川の旧河道の埋積が進んだ時期 [奈良時代～平安時代初期]。伊興遺跡では祭祀場もしくは官衙関連施設は存在するが、遺構・遺物の規模が減少傾向を示す。
- 5 毛長川の旧河道の埋積が進んだ時期 [中世]。伊興遺跡ではさらに遺構・遺物は減少し、遺跡の中心が毛長川沿いから離れ水上交通の拠点としての役割を終える。

はじめに

東京都足立区北部（図1）の毛長川周辺の遺跡調査に参加したのは、下水道工事に伴って広範囲に及ぶ綿密な調査が行われている最中であった。この発掘調査は道路下への下水道管埋設に先立つものであり、掘削の幅はおおよそ2～3mと狭いものであり、一定の地域に対して巨大なトレンチ発掘を進めたようなものであった。

ここでは本発掘調査に先立って試掘調査を行っており、これらの調査を通じて「黄褐色土の地山」の地点では、遺構・遺物が多く発見されるのに対し、「青灰色粘土～砂の地山」の地点では、遺構・遺物が極端に少ないことが経験的に判っていた。しかし調査に参加して間もない筆者が不思議に思ったのが、この地山の変化が突然起きることであった。つまり「黄褐色土の地山」は微高地であり、「青灰色粘土～砂の地山」が低地（旧河道）であるわけだが、このときには、周辺を眺めても微高地と低地の境目がまったく判らなかった。というのは、かなり市街化が進んでいたからである。また単に家屋が密集しているだけでなく、田んぼを宅地にするために盛土されたり、古くからある地割と無関係に道路がつくられたりするなどの人工改変を大きく受けていたためであった。

また、伊興遺跡地元の田中千代吉氏からは「この場所のもと畑で、子供の頃には土器をたくさん拾った。あの場所のもと田んぼだったから、試掘しても何も出ないよ。」などとたびたび教えて頂いた。どうやら現在の地表面から感じられるものとはかなり異なった過去の地形が埋没していることが、おぼろげながら判ってきたのである。そして空中写真の判読による地形分類が有効であるとの予測のもとに、微地形分類に着手したのである。

さらに発掘調査の一環として実施した花粉分析・珪藻分析などの自然科学分析の成果を合わせて検討し、遺跡を取り巻く自然環境の変遷を解明することを試みた。市街化がとくに進んだこの地域では現在まで遺された遺跡は貴重なものであり、その中で発掘調査の対象となるのはまたごく限られたも

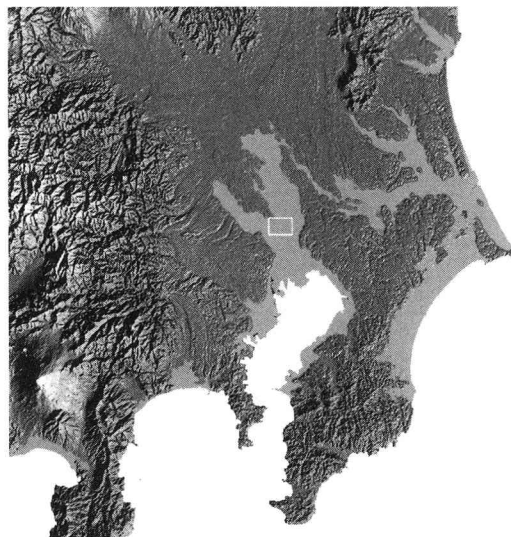


図1 東京低地位置図

のである。しかも発掘調査範囲の幅はおおよそ2~3m程度であり、遺跡全体のほんの一部を調査したに過ぎない。ごく限られた遺構・遺物から当時の社会の一端を明らかにすることはかなりの難題であることを前提として、自然環境の中での人間活動の変遷を五つの段階で概観し、これに合わせて景観印象図を作成した。

①……………微地形分類

(1) 近代・近世の伊興遺跡周辺の景観

さきに、戦後であっても伊興遺跡周辺の景観の記憶が、調査に有効であったことを述べた。ここでは文献にみえる近代・近世の伊興遺跡周辺の景観について注目してみたい。

1920年代頃の伊興遺跡周辺の景観を伝えるものとして、以下のような鳥居龍蔵[1927]の記述がある。

「原史時代（古墳時代）の埴部土器の存在して居る遺跡は、南足立郡の伊興という所にもある。此処は一帶の丘陵地で、その丘陵の下は多く水田となって居る。そうして土地は幾らか低い。此の水田の中に、島のような状態に小高くなって居る土地があるが、其処から祝部土器（須恵器）や埴部土器（弥生土器・土師器）も出て来る、（下略）」

戦後のものとしては、次のような中川徳治[1962a]による記述がある。

「遺跡附近の地形は一様に低平な状態を示しているが、ここに見られる特色は、その中に著しい微高地の発達の見られることである。この微高地は水田面から比高50㎝以上を計測することが出来るもので、その分布状態は、この附近に於てはいつでも北西から南東へ方向をとっている。この方向は附近を流れる毛長川方向と同一であり、更に遺跡の最も近くを流れている保木間堀の流路方向とも一致するものである。」

つまり、少なくとも1962年頃までは市街化があまり進んでいないために、低平な土地の中に島状の微高地が点在する様子が容易に観察できたことが判るのである。

次の資料からは、景観そのものではないが、用水管理から近世の伊興村の土地条件をうかがい知ることができる。

毛長川周辺では、灌漑用水路の脇に遺跡が多い。これは遺跡が立地する微高地上を掘り込んで用水路を通してあるからである。こうした用水路の配置を考えると、高い土地を選び水位を高く維持していたことが改めて理解できる。相当な努力を払って高い土地を選定して通水している用水路ではあるが、どうしても給水が困難な土地が存在する。それでもこうした土地で水田を営んだことを示すのが以下の資料である。多田文夫[1997]は、見沼代用水を共同管理した19ヶ村6町の中で、伊興村は微高地であるため、給水量を確保するために特別な配慮がなされていたことを指摘している。伊興村の主張は、次のように記されている。

「地高ノ場所故、用水掛リ無之候ニ付、日夜汲水不仕候ハテハ、御田地相続難相成」『番水濟口議定証文』天明6年（1786）

つまり水車による汲み上げをしないと水田の維持ができず、さらに給水時間の延長が無ければ耕地の維持ができないとの内容である。協議の結果、伊興村の主張は認められ、配水周期は10日を基本

周期とし、伊興村はプラス1日半を無条件で追加すること。さらに耕地面積によって割り増しする日を半日とし、計12日を周期とするという申し合わせができたというものである。

この文献は18世紀後半の見沼代用水を利用した地域において、伊興村がひとときわ高い微高地であったことを雄弁に物語るものである。

(2) 空中写真の判読による微地形分類

近世・近代の景観を伝える資料から、伊興遺跡周辺は低平な土地の中に微高地が点在していたことが確認できた。しかし、実際の発掘調査で有効な情報は、おおまかな景観ではなく、詳細な微高地や旧河道などの分布である。加えて幅2~3mの下水道管埋設工事に先立つ調査では、発掘によって面的に埋没地形を明らかにすることが困難である。そこで、空中写真を利用した微地形分類が有効となるわけである。以下に具体的な手法と分類基準を記す。

1940年代に米軍が撮影した約2万分の1の空中写真を実体視し判読を進めた。空中写真の判読分類は、おもに土地の比高差・地表の含水状態・土地利用などを基準とした。「微高地」としたのは高燥な土地であり、古くから宅地や畑に利用されているものである。これに対し「⁽⁴⁾低地」としたのは、低く湿った土地であり、主に水田として利用されていた土地である。また明治時代から昭和初期に作成された大日本帝国陸地測量部発行の1万分の1地形図も合わせて参照し、とくに宅地・水田・畑などの土地利用に関する表記に注目した。さらに試掘・立ち会い調査での土層堆積の観察結果も合わせて検討し、毛長川周辺微地形分類図を作成した(図2)。以下に分類ごとに基準を記す。

段丘(高位)：図2の微地形分類図中の北西隅に当たる大宮台地の最南端部の段丘面である。標高は約18mであり、段丘直下の低地との比高差は約14mがある。段丘縁辺部には古墳時代前期の前方後円墳である高稲荷古墳が立地している。

段丘(低位)：段丘(高位)と低地との間に存在する段丘面である。

急斜面：上記の段丘面から低地に至る段丘崖などである。

谷底平野：大宮台地に刻まれた小谷に形成されたもの。

微高地(高位)：主に畑として利用され、旧家などの宅地が点在するひとときわ高く乾燥した土地である。空中写真の実体視では微高地(低位)と比べてひとときわ盛り上がって見える。遺構確認面(地⁽⁵⁾山)は黄褐色土層である。伊興遺跡の発掘調査の基本層序では、微高地上の遺構確認面とした黄褐色土層の上面の標高はおおよそ約2.8m以上である。地形的な成因からみると、毛長川沿いに東西方向の軸をもつ細長い自然堤防に由来するもの、その南に広く分布する砂州に由来するものなどがある。

微高地(低位)：主に畑として利用され、旧家などの宅地が点在する高く乾燥した土地である。空中写真では低地に比べ明るくきめが粗い。遺構確認面(地山)は黄褐色土層である。地形的な成因は上記の微高地(高位)と同様に、自然堤防や砂州などである。

低地(高位)：主に水田として利用されていた土地であり、古くからの宅地はほとんど立地していない。空中写真では微高地に比べ暗くきめが細かくのっぺりとしている。遺構確認面(地山)は青灰色粘土質シルト~中粒砂である。地形的な成因は後背湿地や旧河道などである。

低地(低位)：主に水田として利用されていた土地であり、1947年の写真では家屋はほとんど認められない。空中写真の判読では低地(高位)とは比高差が明瞭に認められる。色調も低地(高位)よ

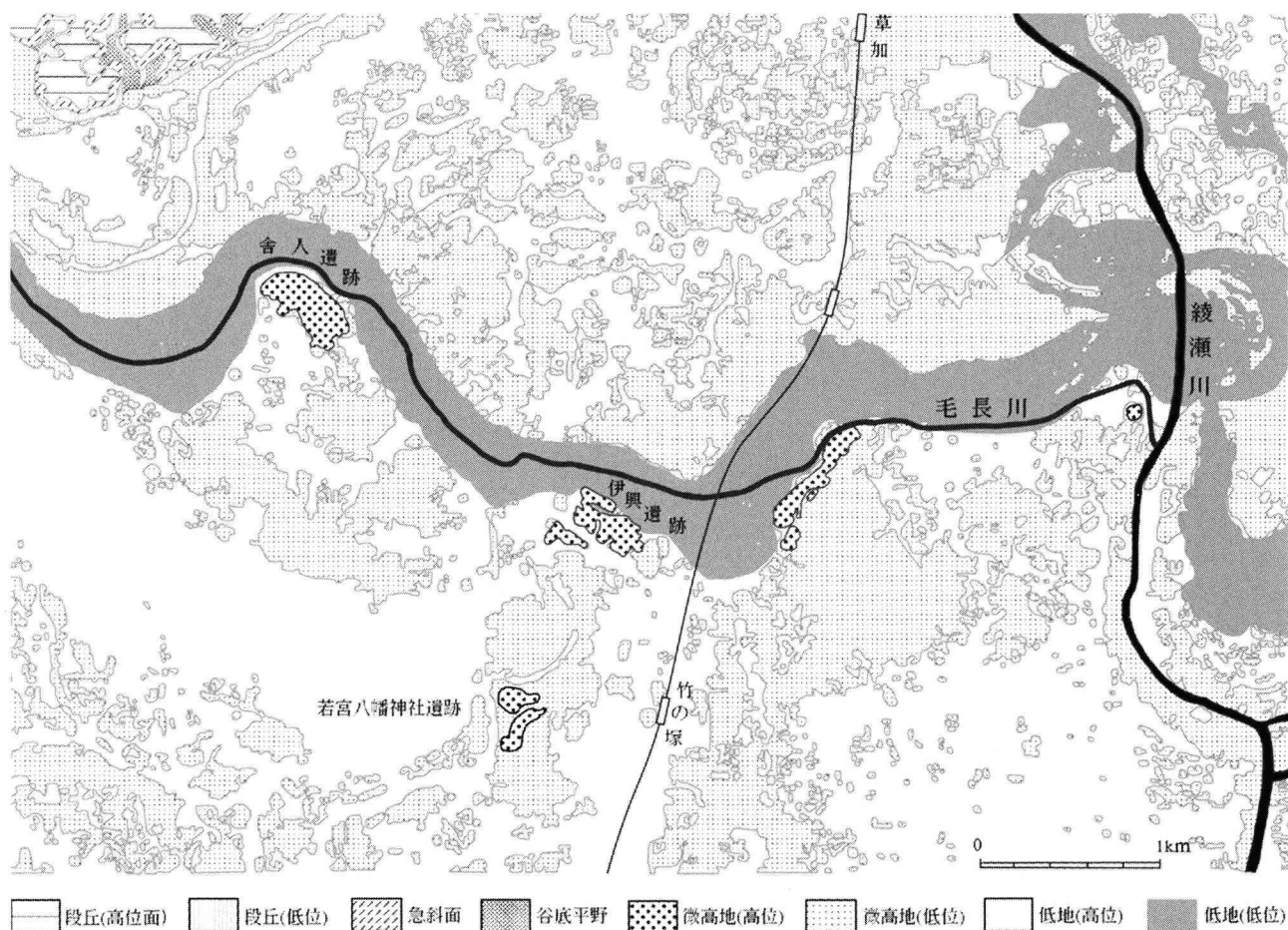


図2 毛長川周辺微地形分類図

りやや暗く、よりきめが細かい。遺構確認面（地山）は青灰色粘土質シルト～中粒砂である。主に毛長川や綾瀬川の旧河道である。遺構はほとんど確認されていない。

(3) 微地形分類図と発掘調査結果との比較

空中写真の判読から作成した毛長川周辺微地形分類図（図2）と発掘調査結果との対応を確認するために、伊興遺跡C-d区断面概念図を作成した（図3）[村石・久保・橋本1994]。試掘段階の知見に基づいて空中写真を判読した微地形分類の結果を図の上部に、発掘調査時のグリッドごとの土層観察を集成した断面図をその下に示した。黄褐色土（粘土質シルト）の地山部分が微高地に、青灰色粘土質シルト～砂の地山部分が低地に良く対応していることがわかる。この伊興遺跡C-d区には、微高地との比高差が約1.5mある低地（旧河道）が存在し、これが空中写真の判読による微地形分類によって区別できたのである。これ以前には試掘により単に低地が点在するという理解であったのが、1本の旧河道であることが判明したのである。伊興遺跡C-d区は戦後に新しく造られた道路であるが、図3に示したように現地表面（舗装路上面）でも数センチから数十センチの比高差が認められることも確認できた[村石1997ab]。

微高地 (高位)

微高地 (高位)

微高地 (低位)

微高地 (低位)

低地 (高位)

空中写真などによる地形分類の結果

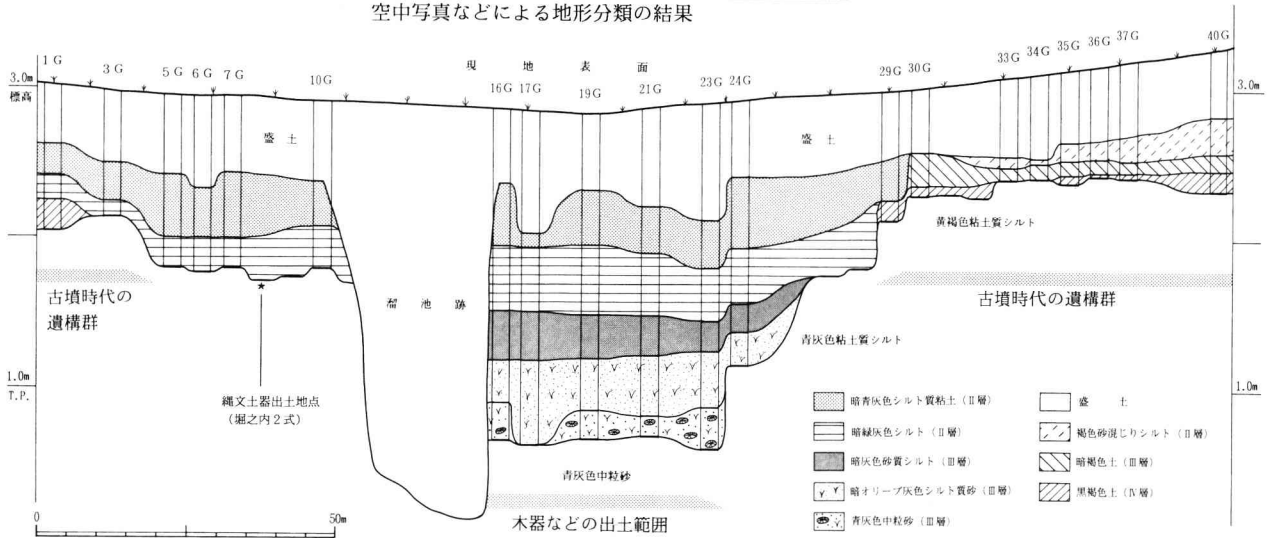


図3 伊興遺跡 C-d 区断面概念図

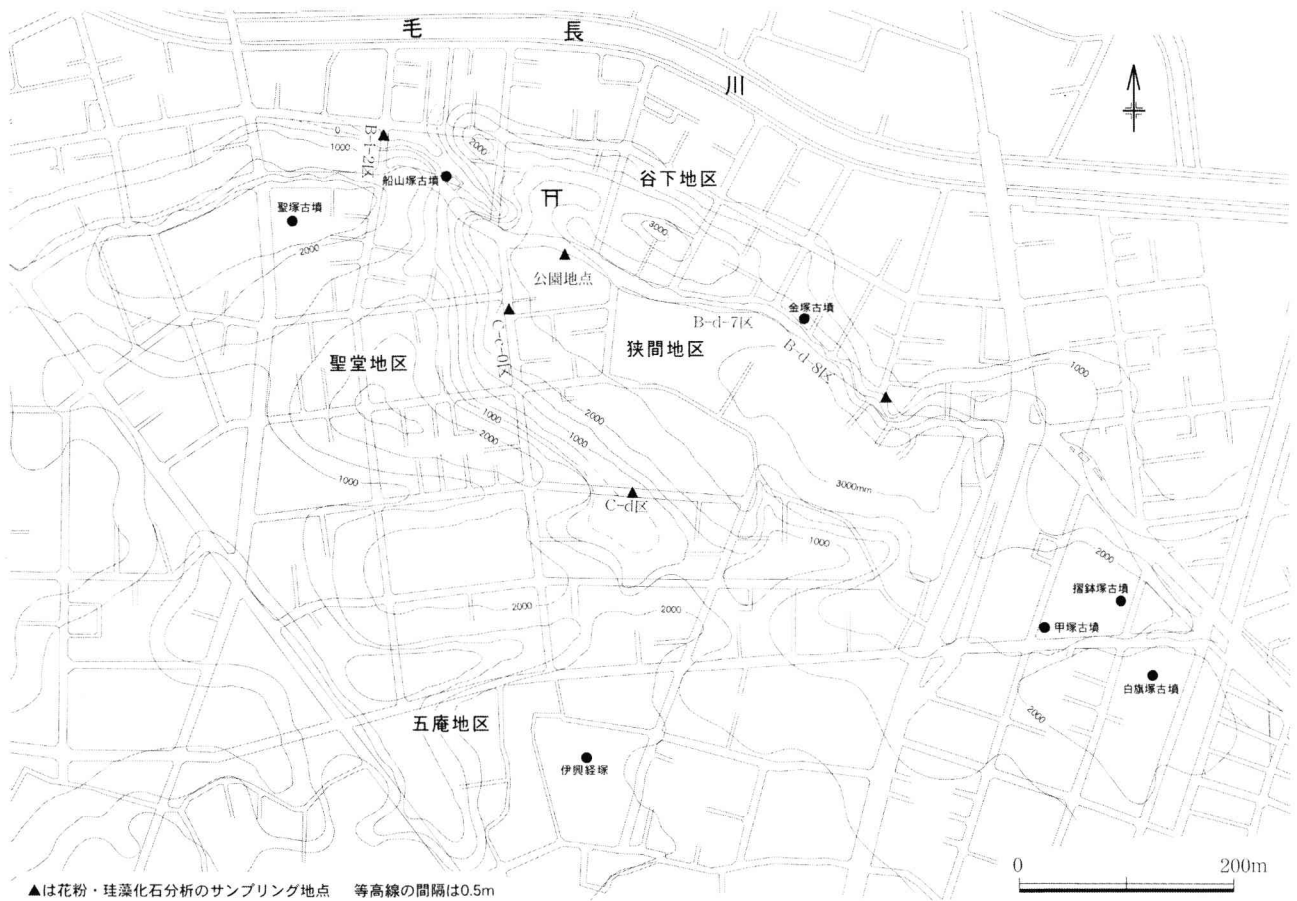


図4 伊興遺跡周辺埋没地形図 (足立区伊興遺跡調査会 [1997] 図9を基に記号を改変。古墳の位置は森・三ヶ島 [1999] による)

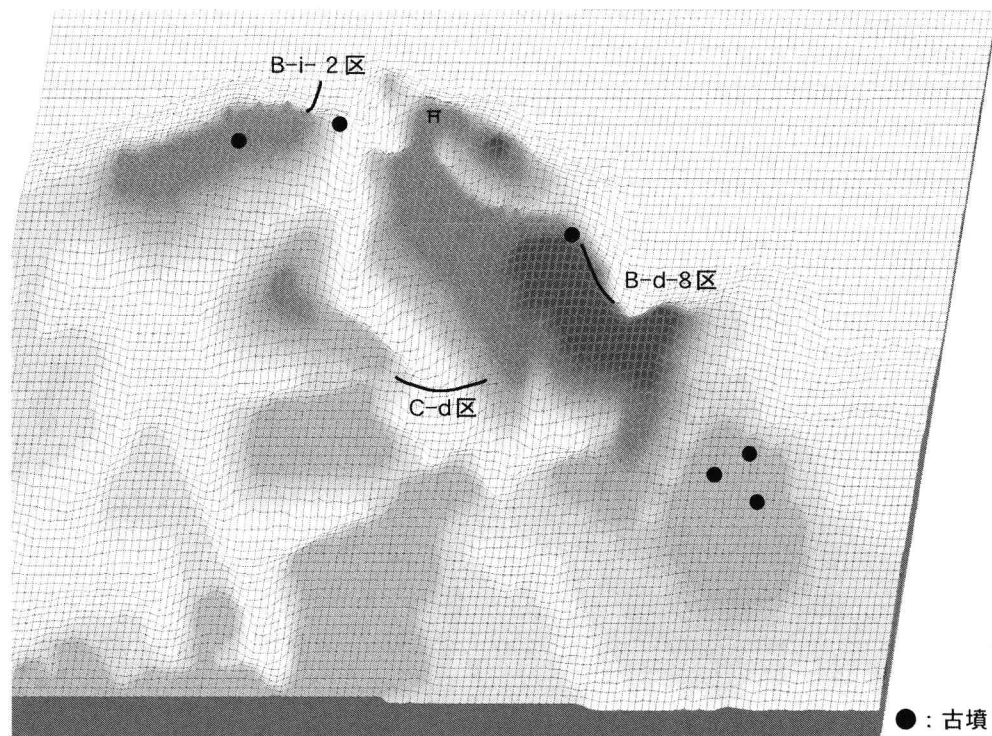


図5 伊興遺跡周辺埋没地形鳥瞰図

毛長川周辺微地形分類図は、発掘に先立って、遺構や遺物が濃密に分布するの否かをある程度予測でき有効であった。また発掘調査の際には、微地形分類図と照合し誤差を修正した。修正を要したのは、主に空中写真に現地を示す有効な目標物がない場合であった。

伊興遺跡調査会では微地形分類図を基礎として、さらに試掘や発掘により得られた地形観察データを蓄積集成していった。こうして発掘で得られた個々の埋没地形のデータを微地形分類図に基づいて集成して作成したのが、伊興遺跡周辺埋没地形図である（図4）〔佐野忠史1997〕。微地形分類図は埋没地形の様相を推定するためかなり有効である。この等高線データをもとに作成したのが伊興遺跡周辺埋没地形鳥瞰図である（図5）。また対象範囲を拡大して、毛長川周辺微地形分類図（図2）を基礎として地形概念図として作成したのが毛長川周辺鳥瞰図である（図11）。ただし毛長川の旧流路の詳細は明らかでないため、現毛長川の河道を図化している。

②……………地形形成概観

これまで述べてきたように、微地形分類により埋没地形の存在が明らかになった。以下では、埋没地形の形成過程と現代に至るまでのその変遷をたどってみたい。

(1) 東京低地

約2万年前ごろの最終氷期のピーク時には海水準は現在より100 m 前後も低く、現在の東京湾の地下に幅の狭い谷があり（古東京川）、浦賀水道付近で太平洋に注いでいた。この時期に形成された

深い谷が、縄文海進により海面下となって沖積層により埋積されていった。こうして利根川・荒川最下流のデルタ（三角州）として形成された低平な平野が東京低地である [久保 1994 a・1995]。この東京低地を構成している地層（沖積層）は下位より七号地層と有楽町層に二分され、さらに有楽町層は縄文海進期の一連の内湾堆積物である下部層と海進後の河成ないし三角州性堆積物からなる上部層に区分されている [遠藤ほか 1983]。これらの地層が、毛長川流域の低平な地形のおおまかな姿を形作っているのである。

(2) 大河であった毛長川

現在の利根川は、近世の河川改修により千葉県銚子から太平洋に注いでいる。ところが改修以前の利根川は、現在も埼玉県春日部市や越谷市などに古利根川の名が残っているように、大宮台地東側の中川低地を流れて東京湾へ注いでいた。そしてさらに古くには、大宮台地西側の荒川低地を流れていたとされている。現在の毛長川⁽⁶⁾は小河川であるが、この低湿地化した旧河道⁽⁷⁾の蛇行波長の規模は大河に相当し、荒川低地を流れていた時代の古利根川や古荒川であったと考えられる [久保 1989・1994 b・1995]。菊地 [1979] や遠藤ほか [1987] によれば、古利根川・古荒川が大宮台地の西側を流れていたのは約 4500～1500 年前頃であり、約 2000 年前以降にはその河道が東遷して、これにより毛長堀（毛長川）は沼沢地化したという。

つまり、古利根川・古荒川の河道が大宮台地の東側に遷ったことにより、毛長川は大河から小河川へと変化した。これにより毛長川が大河であった時期には、大きな蛇行波長をもつ旧河道や自然堤防などの微高地が形成され、微地形の大まかな原形が作られた。その後、毛長川が小河川となると、大きな旧河道跡は埋積が進んで沼沢地化していったのである。

③……………環境と人間活動

以下では時期ごとに、微地形分類に基づいて旧地形を復元し、さらに花粉分析・珪藻分析のデータから堆積環境や植生などを推定し、毛長川周辺の印象図を作成した。また、こうした環境を踏まえて各時期の人間活動についても考察をおこなった。

(1) 縄文時代後期から晩期前半

縄文海進のピーク時には東京低地はほぼ海面下となったが、海退がはじまると毛長川流域はいち早く陸化し始めた。その理由は、大宮台地の延長上にあることに関連すると思われる。久保 [1992] によれば、八潮市から草加市付近では、わずかな高まりとその間の樹枝状の低地とからなる複雑な組み合わせがみられ、樹枝状の低地は旧河道状であるが、大宮台地を刻む谷ともパターンが似ており、埋没した古い地形の名残の可能性があるという。つまり、縄文海進のピークから徐々に海面水準が低下していったが、その際に一様に陸化が進むのではなく、大宮台地の埋没地形や台地に規制された河道配置を反映して干潟が形成され陸化が進んでいったと考えられる⁽⁹⁾。伊興遺跡周辺の発掘成果では、毛長川の旧流路が縄文海進海退期の堆積物を浸食していることが判明している（図 6）。この海退期の堆積物（図 6 の VII 層・VIII 層）は、内湾から汽水域に変化する時期に堆積したシルト混じり砂層、

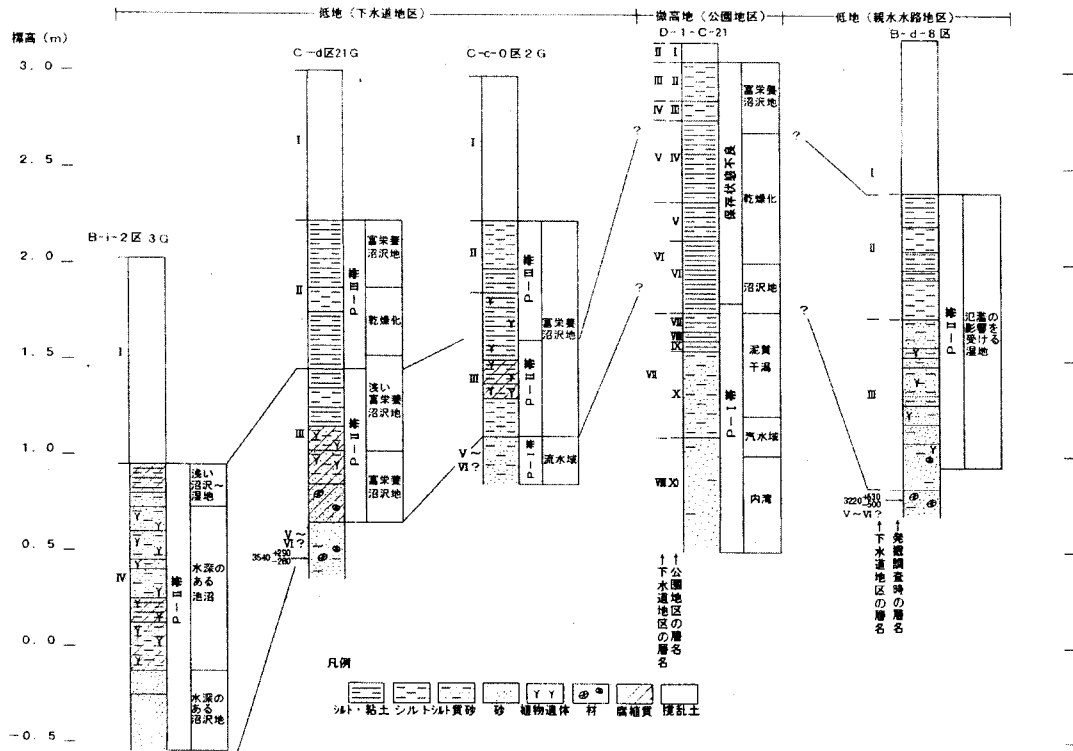


図6 伊興遺跡の層序対比と珩藻化石による堆積域の古環境
(橋本・辻本 [1999] から転載)

泥質干潟の時期に堆積したシルト・粘土層からなり、両層上面の標高はそれぞれ標高 1.2 m, 1.75 m である。このデータは本地域における縄文海進海退期の海水準の変化を捉える際の重要な示準である。

また、毛長川周辺の微高地の形成期を傍証する資料として、二つの縄文時代後期初頭（堀之内式 II）の土器がある。ひとつは、伊興遺跡 C-d 区 8 G（図 7）の低地縁辺部の標高 1.63 m から出土した摩滅がない大型の土器破片である（『伊興遺跡』1997：2-3 節）。しかし、出土層位の局地花粉化石群集帯をみると P-II 帯の下部付近に相当し（図 6）、ここからみると古墳時代前期以降に再堆積した可能性を考慮しなければならない。つまり、この土器の出土位置が縄文時代後期の地形を直接に示すものではないが、この縄文土器が古墳時代前期以降に遠方から運ばれたとは考え難く、土器が作られた縄文時代後期初頭にこの付近にもたらされた可能性が高いのである。

もうひとつは、毛長川を伊興遺跡から 2~3 km ほど下った微高地（高位）上に立地する大鷲神社境内遺跡（図 11-6）から出土した土器である [可見 1962]。この土器は標高約 2.3~2.6 m の褐色粗砂層中から発見されたもので、全体がほぼ完全に復元できるものである。しかもこの土器の包含層の下には、マガキ・ハマグリなどを含む青灰細砂層があり、有楽町貝化石層に対比されている。正式な発掘調査ではないため、出土地点を正確に特定することはできないが、有楽町貝化石層のすぐ上から縄文土器が発見されたことから推測すると、再堆積でなく縄文時代後期からの位置をそのまま保っている可能性が高い。この近辺にも陸化した土地があったことを示すものである。

こうして形成された干潟などを縄文人が訪れた結果残されたのが伊興遺跡 C-d 区や大鷲神社遺跡出土の縄文時代後期初頭の土器であろうと想定される。図 12 は縄文時代後期の伊興遺跡周辺に干潟が形成され、この間を縫うようにクリーク（小河川）が発達し、ときおり縄文人が魚介類を採集に訪れた様子を想像した印象図である。

これ以後の縄文時代の人間活動の痕跡としては、伊興遺跡谷下地区の最高点付近（標高 2～3 m）での縄文時代晩期前半（安行 IIIa 式）の 23 点土器片の出土が報告されている（図 7）[佐々木亜貴子 1997]。しかしこれまで縄文時代に属する遺構の発見はなく、陸化していたものの本格的な居住には至らなかったものと考えられる。

(2) 縄文時代晩期後半～弥生時代

伊興遺跡では、この時期に古墳時代に IV 層（図 6）が堆積することになる微高地とその周囲を取り巻く谷が形成されている。珪藻化石や層相から推定される堆積環境は、流水ないし沼沢地であった。このことは、本時期には河川作用が及ぶようになり、それまで存続した干潟を埋没させていったことを示唆している。このような河川作用の卓越から谷の形成過程として、河川作用により浸食され形成された可能性、あるいは干潟時に存在したとみられるクリークがその後の河川作用が卓越する時期になっても流路として存続し、そこを流下することで形成された可能性などが考えられる。いずれにしても、この時期には河川作用が強まったことは確実であり、大宮台地の東側の荒川低地を古利根川や古荒川が流れ、毛長川は古荒川・古利根川の本流となり、大きな蛇行波長をもつ旧河道と自然堤防などの微高地が形成され、現在に至る微地形の大まかな原形が作られたと考えられる。

関東地方全体の傾向と同様に、毛長川流域においても、この時期の遺跡は希薄である。いまだ遺構は未発見であり、明確な遺物も知られていない。つまり、前後の時期に比べて地形環境が不安定であり、これに対応して人間活動の痕跡も希薄となっていたものと考えられる⁽¹⁴⁾。

図 13 は古荒川・古利根川が大宮台地の東側を流れ、毛長川がこれら大河の流路となっていた様子を想像した印象図である。この時期の各河川の詳細な流路は明らかでないため、流路は現河道をもとに仮に図化したものである。図化のための 3 次元情報は国土地理院発行の数値地図 50 m メッシュデータを利用し、地形を表現するために高さを誇張している。

(3) 古墳時代

伊興遺跡周辺では、弥生時代最終末を除けば弥生時代に属す遺物はほとんどみられず、かろうじて山内清男が 1919 年に採集した篋書絵画を有する弥生土器⁽¹⁵⁾を掲げられるにすぎない [西垣 1962]。しかし、続く古墳時代前期に入ると遺構・遺物の存在が次第にはっきりしてくる（図 8）。伊興遺跡の上流に位置する舎人遺跡では、前期初頭の方形周溝墓が存在し、伊興遺跡では最古の遺構とされる B-d-7 区 6 G-4 号土坑が発見されている。この 4 号土坑は井戸跡とされており、その掘り込み確認面は標高約 2 m であり、底面は 1.02 m である。井戸跡とすると、この地点は乾いた土地であり、この近くで水を安定して必要とした何らかの活動が行われたと考えられる⁽¹⁶⁾。また、同様に井戸跡と推定されている B-d-8 区 2 G-1 号土坑の掘り込み確認面の標高は約 2.5 m、底面の標高が 0.8 m であり、この付近の地下水位はおおよそ 1 m 程度であったと考えられる。つまり、微高地を取りまく低地は標

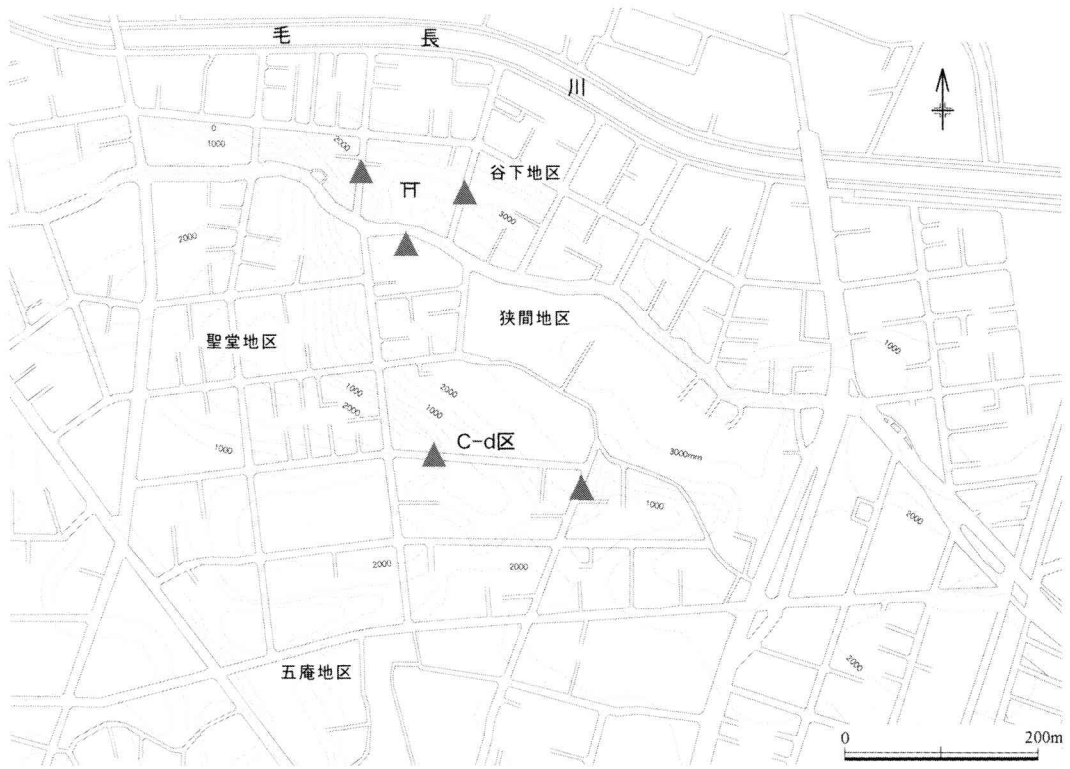


図7 伊興遺跡周辺の縄文時代の遺物分布

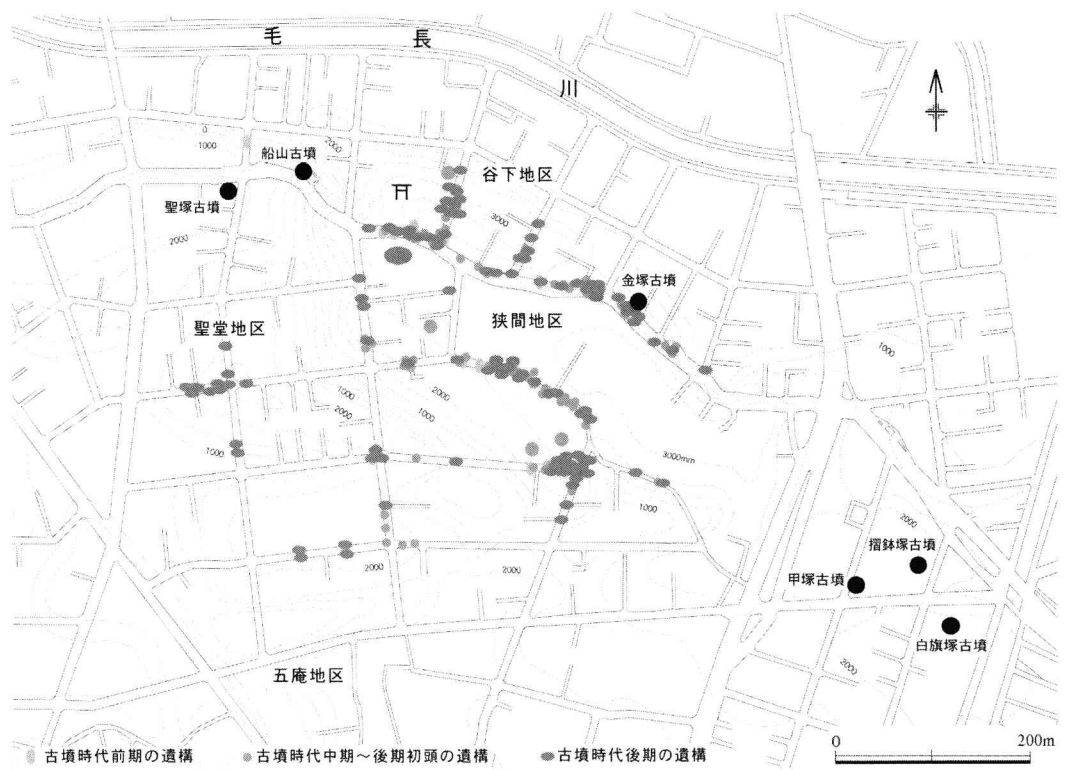


図8 伊興遺跡周辺の古墳時代の遺構分布

高約1m前後まで水に浸かり、谷を形成していたと推定される。また伊興遺跡の狭間地区・公園地区には焼土や炭化物とともに大量の土器を含む土坑などの遺構が存在し、また舟形の木製形代を含んだ古墳時代前期の遺物を集中的に包含し出土したB-i-2区などが確認されている。

発掘調査で得られた堆積層の花粉分析・珪藻分析などから、次のようなことが明らかになっている。本時期には既に遺跡内に谷が形成されており、微高地と谷（低地）の地形環境が成立している。谷内は比較的安定した沼沢地ないし池沼の水域が広がり、ガマ属、サジオモダカ属、コオホネ属などの抽水植物、沈水植物のスイレン属、フサモ属、浮葉植物のアサザ属（ガガブタを含む）などが分布する、ある程度水深のある水域であった。この谷は埋積の進行に伴って、浅い富栄養沼沢地のような状態へ変化していき、浮葉植物の種類は姿を消していったとみられる。また、出土木製品に鋤・鍬など農耕具があり、この時期には既に集水域において稲作が行われていたことが推定される〔村石・橋本・辻本1999〕。

このように人間活動が活発となってきた古墳時代には、微高地間の谷は洪水などの影響は受けるものの、比較的安定した環境が継続していたことが推定される。このことから縄文時代晩期後半～弥生時代（約4500～1500年前頃）には毛長川は古利根川や古荒川に相当する大河であったが、本時期にはその河川作用の影響は及ばなくなり、河道は別の場所に移動していたとみられる。

大河である古利根川・古荒川が東遷した（約2000年前以降）後には、毛長川には大きな旧河道跡とこれに沿った微高地が残された。このように大河の旧河道跡を流下する毛長川は航路として大きく安定的であり、河川交通のルートとして最適であった可能性が高い。古墳時代の毛長川の詳細な流路は明らかでないが、流路は大まかには微地形分類の低地（低位）に当たる旧河道跡に沿っていたものと思われる。一般に川が蛇行したときに、河床が抉れて水深が深くなるのは遠心力の働くカーブの外側である。こうした毛長川の蛇行から見ると、伊興遺跡・法華寺境内遺跡・花畑遺跡が立地するのはカーブの外側にあたり、渇水期にも安定的な水深が得られ船着場として有利であった可能性がある。中でも伊興遺跡が立地する微高地は、規模が大きく拠点的な集落が形成可能な条件を備えていることが言える。さらに詳細にみると、淵の宮とも称される氷川神社を中心とする東西で特異な遺物を多く出土したB-i-2区やB-d-8区を中心とする部分（図4）は、旧河道が微高地のある南側に向かって彎曲し微高地に安定的な水深が想定される部分であることは注目に値する。

こうした条件を反映して、伊興遺跡では古墳時代前期には祭祀的性格の色濃い遺構と遺物が多く発見され、さらに古墳時代中期・後期はじめには、多くの古式須恵器に加えて韓式系陶質土器が出土している⁽¹⁷⁾。これらは東日本の中でも特異な存在であり、東京低地を代表する水上交通の拠点として水の恵みと猛威に関わる祭祀活動が行われたものと推定されている⁽¹⁸⁾。

これと対照的なのが舎人遺跡である。舎人遺跡が立地する微高地は、伊興遺跡の立地するものより規模が大きく標高も高い。そして伊興遺跡と並んで早くも古墳時代前期初頭には方形周溝墓が作られ、その後も集落が形成されている。しかし、舎人遺跡付近の旧毛長川の旧河道跡をみると、微高地とは反対の北側へ強く蛇行している。つまり、舎人遺跡付近の場合では、水深が深くなるのは微高地とは反対側の北岸となってしまう。微高地の規模は大きいものの船着き場としては不都合であった可能性が高い。つまり、舎人遺跡は一般的な集落跡や墓域として遺跡が形成されていったものと考えられる。

図14は、微地形分類と発掘調査によって明らかになった伊興遺跡の旧地形を基に景観を想像した

印象図である。ただし、毛長川の詳細な流路は明らかでなく現河道をもとに仮に図化している。また微地形を表現するために、高さを強調している。そして、前述のように珪藻分析・花粉分析から微高地を取り巻く谷内には比較的安定した沼沢地ないし池沼の水域が広がり、この時期には既に集水域において稲作が行われていたことが推定されている。

(4) 奈良・平安時代初期

伊興遺跡全体では古墳時代後期になると遺構数の減少傾向がみられ、奈良・平安時代の遺構の分布はさらに希薄となり、より分散化する傾向にある(図9)。しかし、奈良時代末から平安時代初期の遺物を集中的に包含するB-d-8区20-25Gの特異な存在が注目される。また微高地の縁辺にあたる部分からは20G-1号井戸が発見され、B-d-8区の南側に集落などが営まれたことが想定される。出土遺物には、木簡・墨書土器・斎櫛・帯金具などがあり、祭祀場もしくは官衙関連施設が存在した可能性が推測される。

この時期の遺跡が古墳時代と比較して単に希薄分散化したのではなく、遺跡の性格自体が変質してきているものと考えられる。奈良・平安時代には微高地を取り巻く低地の埋積がさらに進み、微高地と低地の標高差は小さくなっている。谷内は富栄養沼沢地のような水域環境へと変化している。この堆積物からは栽培種のイネ属由来の化石が多産していることから、当時の谷内では稲作が行われるようになったことが推定される。本時期の谷内で認められた水域は水質的には富栄養であったと推定され、谷内で水田が行われるようになったことと関係している可能性がある。また、花粉化石などで認



図9 伊興遺跡周辺の奈良・平安時代の遺構分布

められたオモダカ属などの抽水植物の種類は当時の水田雑草の種類であった可能性があり、本時期は前時期に比較してより人間の活動が活発化したことが推定される。

図15は微地形分類と発掘調査によって明らかになった伊興遺跡の旧地形を基にした印象図である。毛長川の詳細な流路は明らかでなく現河道をもとに仮に図化している。また微地形を表現するために高さを強調している。珪藻分析・花粉分析からは、埋積が進み微高地と低地の標高差は小さくなり、谷内はさらに富栄養沼沢地のような水域環境へと変化し、当時の谷内では稲作が行われていたと推定される。

(5) 中世

これまでの発掘調査の結果、奈良時代末から平安時代初期の遺物が集中的に出土したB-d-8区は9世紀前半以降の遺物を出土していない。狭間地区はこの頃を境として、次第に廃れてく様相がうかがわれる〔永峯・佐々木1999〕。こうした伊興遺跡狭間地区の衰退に代わって、伊興遺跡南部（五庵地区）⁽¹⁹⁾やそれに隣接する若宮八幡神社遺跡が奈良・平安時代以降発展をしている〔佐野1999〕。

毛長川から1km程度とはいえ、内陸側の若宮八幡神社遺跡付近に集落の中心が移っていったという点は重大である（図2）。水上交通の拠点としての役割がほとんど失われたと考えざるを得ないからである。しかし伊興遺跡狭間地区からは中世に属する火葬墓が8基確認されており、中世の伊興遺跡の中心を応現寺の位置する五庵地区とするならば、狭間地区は葬送などを執り行う非日常的な場所として利用されたことが指摘されている〔三ヶ島1999〕⁽²⁰⁾（図10）。図16は微地形分類と発掘調査によって明らかになった伊興遺跡の旧地形を基にした印象図である。毛長川の詳細な流路は明らかでなく現河道をもとに仮に図化している。

13世紀半ばの『吾妻鏡』には伊古宇又二郎⁽²¹⁾という伊興を名字の地とする武士が登場し、伊興の地が陸路の幹線道路網に深く関係していることが確認できる〔加増1999〕。佐々木〔1998〕は遺跡調査の成果と古道の検討に基づき、開発の歴史を概観している。足立区の歴史は伊興・舎人遺跡をはじめとする北辺に始まり、若宮八幡神社を介在し、中曾根城・千住宿の存在する南辺に到達するとし、毛長川の開発から荒川のそれへの転換ということも可能としている。また中曾根城を経て慶長2年（1597）の千住における宿場の成立は、決定的であったに違いない。すなわち平安時代以前には「下足立」地域の中心であり、開発の端緒となった毛長川流域のさまざまな集落は、この頃には千住宿を取り巻く近郊農村の一つにすぎなくなってしまうからである。

これ以後近世に至っても、伊興周辺が水上交通の拠点であることを示す資料は見られず、わずかに伊興村の幕領分の年貢米が氷川神社の東側の谷下地区から舟で積み出され、綾瀬川経由で浅草御蔵へ納められていること、また氷川神社が古くは「淵之宮」と呼ばれていた伝承が残されているにすぎない。つまり中世には、伊興周辺の水上交通の拠点としての役割は、すでに失われたものと考えられる。⁽²³⁾

しかしながら伊興遺跡の中心と推定される公園地区の北側で、しかも毛長川へ突き出す微高地（高位）上に、かつて「淵之宮」とよばれた氷川神社が存在することは大いに注目に値する。加増〔1999〕は氷川神社が本来の「淵之宮」の呼称を近世初頭に変更したもので、淵之宮は古代の毛長川水運と不可分に結びついた在来の神格であり、郷域開発の起点となり、中世には郷鎮守に転化したものと推定している。⁽²⁴⁾近世以降も淵之宮は氷川神社の名を冠せられ、伊興・保木間・竹塚三村の鎮守として篤く

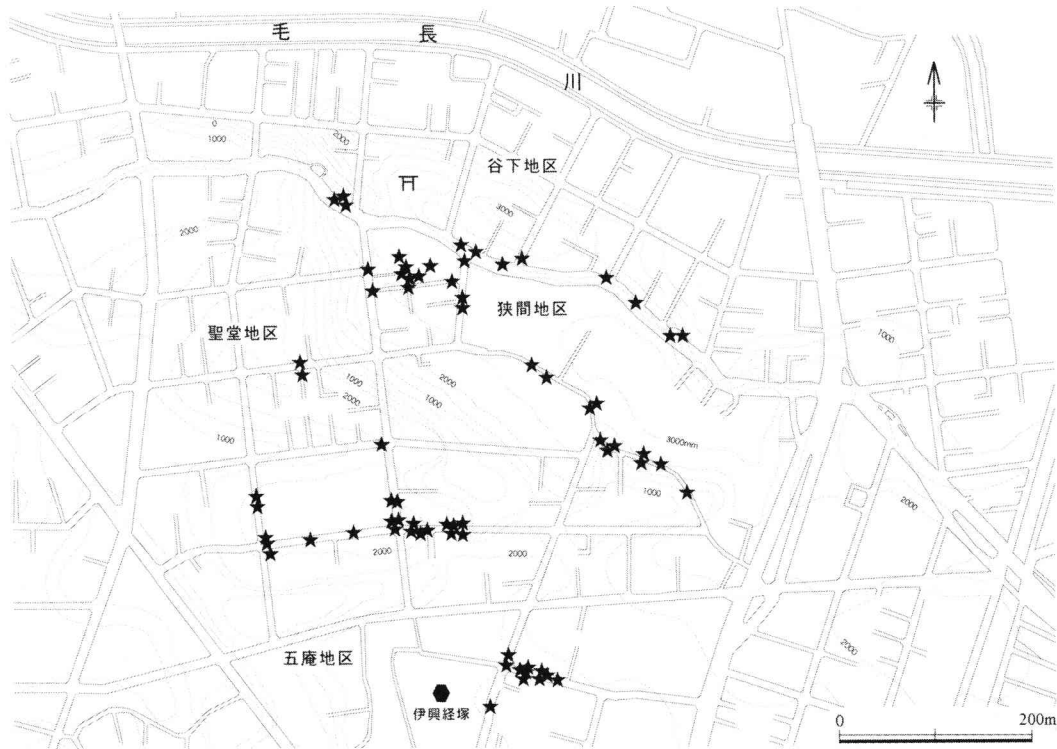


図 10 伊興遺跡周辺の中世の遺構分布

信仰され、また明治時代まで「瀨之宮」の呼称が口伝として伝えられていることは、それだけ「瀨之宮」が地域にとって大きな役割を果たしていたことを傍証するものと考えられる。⁽²⁵⁾

まとめ

伊興遺跡をはじめとする足立区北部の発掘調査と併行して、米軍の2万分の1空中写真を判読し微地形分類を行った。分類に当たっては、各地点の発掘調査での土層観察結果や1906～1936年の地形図などを照合し総合的に判断した。その後、伊興遺跡調査会では、微地形分類図を基礎として発掘調査データを集成し、伊興遺跡周辺埋没地形図を作成している。

そして発掘調査によって発見された遺構や遺物、また文献資料などを総合的に概観し、これに花粉化石や珪藻化石などの分析成果を加え、毛長川周辺の自然環境と人間活動の変遷過程を五つの段階で捉え、それぞれに対応する景観印象図を作成した。

発掘調査から得られる情報は精緻なものであるが、発掘調査の対象となる範囲は地域全体としてはきわめて狭い。そこで精度はやや粗いものの広範囲な分析に適した空中写真から古地形判読を行い、それぞれの調査方法を相互に補完することに努めた。つまり、地域に対して、点や線でしかない発掘情報を面的に広げて解釈を試みたものである。

謝辞

佐々木彰氏をはじめとする足立区教育委員会・足立区伊興遺跡調査会・足立区遺跡調査会のみなさんには発掘調査時をはじめとして、その後足立区を離れて以降の資料調査にいたるまで多くの協力に加え、発表の機会も与えていただいた。また、久保純子氏・橋本真紀夫氏・辻本裕也氏・田中千代吉氏をはじめとするみなさんからは様々ご教示を得た。末筆ながらお礼を申しあげる。

註

(1) — 現在の埼玉県さいたま市(旧浦和市)・川口市にかつてあった「見沼溜井」は足立区域を含めた洲江領をはじめ多くの地域への農業用水の貯水地として機能していたが、これを干拓し新田開発するために、代わりの用水という意味で開発されたのが「見沼代用水」である。徳川吉宗が享保期に行った幕政改革の代表的施策であり、享保12年(1727)に用水開削が開始された。

(2) — この議定に参加した19ヶ村6町は、見沼代用水のうち神領堀(現在の足立区西部にあたる舎人村・古千谷村・入谷村・鹿浜村など)をのぞく5水系がかかる全町村、伊興両村・竹塚村・保木間村・花又村・内匠新田・嘉兵衛新田・五兵衛新田・伊藤谷村・弥五郎新田・次郎左衛門新田・梅田村・島根村・六月村・栗原村・西新井村・興野村・本木村・小台村・千住一から五丁目、同掃部宿であり、現在の足立区の中で西側の一部を除いた大多数の村々と千住の町を含む大きな地域に該当する。こうした広範囲な地域の中でも、伊興の土地がきわだって高かったことを示すものと言える。

(3) — 伊興村には、谷下・聖堂・五庵・狭間・白幡・前沼・見通・大境・諏訪木・槐戸・京伝・一丁目・五反田・番田・吉浜・村廻の16字があり、北部の一角に伊興遺跡は存在する。近世初期以来伊興村は幕領であったが、17世紀後半に東叡山寛永寺領が成立し、それぞれ名主が置かれたため、合わせて伊興両村とも呼ばれた。

(4) — 微地形分類の中で「低地」としたのは微高地に対して低い土地という意味の分類であり、成因としては後背湿(低)地や旧河道などで構成されるものである。「山地・丘陵」「台地」などに対しての大分類としての「低地」ではない。

(5) — 地山とはその土地本来の地盤のことであり、ここでは部分的に河川作用や人為的に掘削されていない地盤を指している。

(6) — 中川徳治[1962b]は毛長川の谷には、江戸時代に毛長沼が存在したことを指摘し、『新編武蔵風土記稿』を引用して次のように述べている。このことから近世には、毛長川の河道の埋積が進み、河川というよりも沼と

して捉えられ、さらに通船のために開削した堀が存在するという認識であったということが読み取れる。

毛長沼

村(足立郡新里村[現在の埼玉県草加市新里のことであり氷川神社の北西にあたる])の西南の方にて当村および古千谷村入会の沼なり。広さ11町3段9畝。その内当村に係る所1町5段7畝と云う。今は所々水田を開きて高入りとし、又水深き所には蓮などを多く植て生産の資とす。この沼より続き堀あり、即毛長堀と呼ぶ。末流は花又村にて綾瀬川に入る。巾4間。

これによって毛長沼・毛長堀(毛長川)の状態がよく窺われる。この毛長川の谷は毛長沼の存在によって知られる如く、比較的近時まで河谷の陸化して行く途中に見られる沖積低地特有の状態を示していたものと思われる。

(7) — 図2毛長川周辺微地形分類図の「低地(下位)」の部分に当たる。

(8) — 中川徳治[1962b]は「毛長沼は古くから荒川の旧流路を示すものといわれている。前記の風土記稿にも荒川はここを流れて綾瀬川に合流した旨の説明が見えている。地形上からもまた此処に過去に於いて一流路の存在したことは十分に考えられる。(中略)この毛長沼・毛長川の流路もまた過去に於ける利根川、荒川と関係づけられるのである。」と早くも毛長川の流路が利根川・荒川に関連することを指摘している。

(9) — 羽田栄太[1988]は『「おおむね海であった」ところに寄州ができていく。その段階で谷塚(草加市)や伊興、竹塚は地質そのものの上でも高い基盤の上であって、寄州もできやすい地形だった(ボーリングの結果が物語っている)』と指摘している。

(10) — ここでは以下の下水道地区における層序区分を用いる。

層名	遺物による年代観	堆積物の特徴
I層	現代	攪乱層
II層	近世以降	暗褐色灰色シルト~粘

		土	
III 層	奈良・平安時代～中世	灰～黒色シルト～砂	[1999] は、初期・古式須恵器を出土する遺跡が旧入間水系に沿った地域などに集中的に分布し、この地域への初期須恵器の供給は、奥東京湾に面して立地し河川交通の要所に位置する伊興遺跡を經由して地域首長の手に供給されたと論じた。これに対し酒井清治 [1999] は海から運ばれたという供給ルートは間違いないが、伊興遺跡では須恵器は広い範囲で出土し、集積場を想定できず、同一窯の生産品も確認できず、拠点集落であるために須恵器がより多く供給されたものと論じている。
IV 層	古墳時代	灰～黒褐色シルト・砂	
V・IV 層	時期不明	地山とされる黄褐色・青灰色シルト	(18) — 永峯光一 [1976] は「東部低地を見渡すと、狭間・谷下両遺跡を中心とした伊興遺跡群に匹敵する規模の同時代遺跡は知られていないし、多分存在しなかったとみてよいであろう。伊興遺跡群における祭祀遺物の豊富さは、前述のような単に原始信仰の一般論では、解釈のつかない部分があるといわなければならないであろう。伊興遺跡における普遍的で多量な祭祀遺物の存在は、集団としての次元で考慮した方が適当であるように思われる」と述べている。
VII 層	時期不明	地山とされる青灰色シルト混じり砂層	(19) — 近世末の景観を伝えるものと考えられる大日本帝国陸地測量部作成の地形図 1/20000「王子」明治 42 年 (1909) 発行や 1/25000「草加」大正 6 年 (1917) 発行では、集落は五庵地区より南の若宮八幡神社遺跡付近を中心とする場所に立地しており、これに対し古墳時代に伊興遺跡が繁栄した狭間地区は、田んぼや畑が広がるばかりである。中世・近世の集落の位置は明確ではないが少なくとも近世末には若宮八幡神社遺跡付近に伊興村の集落の中心があったことが窺える。
VIII 層	時期不明	地山とされる青灰色砂層	(20) — 奈良・平安時代まで多くみられる竪穴住居は発見されやすく、しかもその中に土器などの遺物を包含することが多いため、発掘調査の主要な対象となっている。しかし、中世に入ると竪穴住居は廃れ遺構の発見される割合はかなり低下していることが容易に想定される。一般的には中世の集落は近世の集落へと継続される傾向が強く、中世以降の集落については文献調査を含めた詳細な調査が必要であると考えられる。
	(11) — 可児 [1962] は花畑遺跡と報告しているが、その後遺跡名が変更されて現在は「大鷲神社境内遺跡」と呼ばれている。		(21) — 『吾妻鏡』建長 8 年 (1256) 6 月 2 日条には、鎌倉時代の東北地方への幹線道路である奥大道に夜討・強盗が出没した事につき、幕府が所領内に奥大道が通過する地頭 24 名に対し「宿直人」を所領内の宿々において警戒にあたるように指示した記事が見える。幕府の命令を受けた 24 名の地頭中、武蔵国内では、清久左衛門次郎 (埼玉県久喜市)・渋江太郎兵衛尉 (岩槻市)・鳩井兵衛尉 (鳩ヶ谷市)・矢古宇左衛門次郎 (草加・川口市)・伊古宇又二郎がいる。加増 [1999] によれば、中世の奥大道は鎌倉街道の中道、武蔵国内ではほぼ近世の日光御成
	(12) — 西垣 [1955] は花畑町二十二番地附近から縄文時代前期の織維土器が出土したことを報告しているが、その詳細はあきらかでない [佐々木亜貴子 1997]。しかし、伊興遺跡から南西約 10 km にあたる荒川右岸の自然堤防上の板橋区舟渡遺跡第 3 地点からは中期初頭の五領ヶ台式土器を伴って礫集中が発見されており、この地点ではすでに縄文時代中期初頭には陸化し縄文人が活動の痕跡を留めていることが確認できる [板橋区舟渡二丁目遺跡調査会 2000]。		
	(13) — 可児 [1962] は A.P. (荒川工事基準面もしくはは霊岸島量水標) 1.2～1.5 m と報告しているが、ここで標高の基準としている T.P. (東京湾平均海面もしくは東京湾中等潮位) に換算 (T.P.=A.P.+1.134 m) すると 2.3～2.6 m となる。		
	(14) — 先駆的な居住が試みられたが河川堆積作用が発発でその痕跡が押し流されてしまったことも想定される。しかし、土器片などの遺物もほとんど出土しないことからみて、居住は例外的なものであった可能性が高い。		
	(15) — 弥生時代終末期と古墳時代前期初頭の土器区分が見直され、以前に弥生土器とされたものの大部分が古墳時代に属することになっている。		
	(16) — 井戸が生活用水を得るためのものでなく、非日常的な役割を果たすものと解釈する説もある。水山 [1999] は伊興遺跡の井戸群が住居群と空間的にも時間的にも相関関係が薄いことから、非日常的な用途、即ち水を使用した祭祀を目的とした可能性があることを指摘している。		
	(17) — 古式須恵器や韓式系陶質土器は出土する遺跡がごく限られていることから、大いに注目されている。酒井清治 [1999] によれば、須恵器から見た場合伊興遺跡の特徴は、5 世紀代には陶邑古窯跡群 (大阪市堺市) からの直接的な需給関係が想定できるとしている。伊藤潔		

街道に相当すると考えられており、上の5名の地頭はそのルート上に合致している。伊古字又二郎は、伊興を名字の地（家系の発祥地、氏族の本拠地）とする武士と考えられるという。

(22) — 現在の「伊興」とは用字が異なるが、隣接する矢古宇郷（『新編武蔵風土記稿』には「谷古宇村」と表記されている。筆者註）との絡みで言えば、「伊古宇」が「伊興」よりも古い用字であると思われるという。

(23) — 伊興遺跡周辺が水上交通の拠点的性格を失った原因については具体的な裏付けはまだないが、次のようなことが想定される。ひとつには毛長川の埋積が進み、舟を行き来させる水路を維持することが困難となってきた。このため別の水系に取って替わられていった。あるいは律令国家体制の下で陸路の官道の整備が進められ、水上交通の役割が相対的に低下した。また平安時代後半に登場した武士団は、騎馬を活用するために陸路を重視したことなどが考えられよう。

(24) — 加増 [1999] は水川神社にも注目し、『新編武蔵風土記』には慶長14年銘の棟札で「伊興村水川大明神」の社名が近世初期には既に確認できるが、本来の「瀧之宮」の呼称を近世初頭に社名を有名社に変更したものと推定している。

(25) — 加増 [1999] は、明治期作成の神社明細類の伊興村水川大明神に関する記事を掲示している。

A 明治五年 神社取調書上帳 その二 社事掛
当社起原之儀は、旧古にして年曆相分不申候（中略）

上古は此地大江二而此郷を瀧江領と名付、当社を瀧之宮と申伝候、即当領之社頭二有之古来より郷人申伝候

B 神社明細ノ事 明治十八年六月中取調書上写
(常田家文書 「伊興村明細帳」)

鎮座之原由不詳。中興以来此郷ヲ瀧江領ト申シ、当社を瀧之宮ト称ス。即チ瀧江領四十八ヶ村総鎮守ト申シ伝ヘアリ。何ノ頃ヨリカ保木間村・竹之塚・伊興村等而已ニ相減シ（後略）

C 明治十八年中内務省地理局へ取調書写（同上）
当社ヲ瀧之宮ト号。往昔此地瀧江ノ郷ノ称アリ。因テ名ク。瀧江郷此宮ヨリ起ルト云伝フ。（後略）

また西垣隆雄 [1955] も瀧之宮の由来として伝えるところによれば、「往昔社殿の北方埼玉県北足立郡新郷村八幡山に至る間、一帯の泥江にして、船にて往来を通ぜしという意なりしを以て、瀧の字を当て市なり」と、又「瀧江の郷、この宮より起る」とも云われており興味深いことであると述べている。

これらは明治時代に記録された口伝であって、どこまで時代を遡れるのか確証はないが、伊興に水が淀んだ「瀧」があり、これから瀧之宮そして瀧江領の名が起ったことを伝えるものと考えられる。このことは古荒川・古利根川が大宮台地の東側に移って以降、毛長川の埋積が徐々に進んでいった様子をおぼろげながら伝えるものと言えよう。

引用文献

- 足立区伊興遺跡調査会 1988『武蔵伊興』足立区教育委員会 pp. 1-91
足立区伊興遺跡公園調査会 1992『伊興遺跡』
足立区伊興遺跡調査会 1997『伊興遺跡』下水道敷設工事に伴う発掘調査
足立区伊興遺跡調査会 1998『足立区北部の遺跡群』若宮八幡神社遺跡・花畑遺跡・法華寺境内遺跡・白旗塚古墳群・大鷲神社境内遺跡・古千谷地区 下水道敷設工事に伴う発掘調査
足立区伊興遺跡調査会 1999『伊興遺跡』II 保木間堀親水水路整備工事に伴う発掘調査
安藤義雄 1999「下水道調査以前の伊興遺跡調査の歴史」『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 31-42
板橋区舟渡二丁目遺跡調査会 2000『舟渡遺跡第3地点発掘調査報告書』pp. 20-23
遠藤邦彦 1988 草加市の地質と古環境 『草加市史』自然考古編, pp. 23-234
可児弘明 1962「東京東部における低地帯と集落の発達（上・下）」『考古学雑誌』47-1・2, pp. 1-148
久保純子 1989「東京低地における縄文海進以降の地形変遷」『早稲田大学教育学部学術研究（地理学・歴史学・社会科学編）』第38号, pp. 75-92
久保純子 1994 a「三郷市とその周辺の地形」『三郷市史』第八巻, pp. 13-35
久保純子 1994 b「東京低地の水域・地形の変遷と人間活動」『防災と環境保全のための応用地理学』大矢雅彦編, 古今書院, pp. 141-158
久保純子 1995「蕨市の土地の生い立ち」『蕨市史』pp. 38-46
酒井清治 1999「毛長川流域における5～10世紀の須恵器の様相」『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 169-177
佐々木亜貴子 1997「古墳時代以前の主な遺構と遺物 縄紋時代」『伊興遺跡』下水道敷設工事に伴う発掘調査 足立

-
- 区伊興遺跡調査会, pp. 89-93
- 佐々木彰 1998「歴史的背景」『足立区北部の遺跡群』若宮八幡神社遺跡・花畑遺跡・法華寺境内遺跡・白旗塚古墳群・大鷲神社境内遺跡・古千谷地区, 下水道敷設工事に伴う発掘調査, pp. 20-22
- 佐野忠史 1997「土層堆積状況」『伊興遺跡』下水道敷設工事に伴う発掘調査 足立区伊興遺跡調査会, pp. 30-33
- 佐野忠史 1999「足立区北部の遺跡群出土の中世～近世陶磁器」『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 255-264
- 辻誠一郎 1989「植物と気候」『弥生文化の研究』1, 雄山閣出版, pp. 160-173
- 多田文夫 1997「伊興地域の用水について」『伊興遺跡』下水道敷設工事に伴う発掘調査 足立区伊興遺跡調査会, pp. 351-356
- 鳥居龍蔵 1927『上代の東京と其周囲』9-3・4, 磯辺甲陽堂, 西垣隆雄(1955)所収
- 中川徳治 1962「遺跡の地形環境」『武蔵伊興』國學院大學考古学研究報告 第二冊, pp. 8-9
- 中川徳治 1962b「遺跡の地形学的考察」『武蔵伊興』國學院大學考古学研究報告 第二冊, pp. 60-65
- 永峯光一 1976「荒川沖積地における遺跡」『荒川沿岸地区における考古学調査』pp. 1-11
- 永峯光一・佐々木彰 1999「下水道関連遺跡の遺跡調査の概要」『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 11-30
- 西垣隆雄 1955「足立区の考古学的考察」『足立区史』pp. 42-87
- 西垣隆雄 1962「余説 周辺遺跡の考察」『武蔵伊興』國學院大學考古学研究報告 第二冊, pp. 107-118
- 橋本真紀夫・辻本裕也 1999「層序・年代」『伊興遺跡の立地環境と古環境について』『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 295-306
- 花井三夫 1962「発掘の動機とその成果」『武蔵伊興』國學院大學考古学研究報告 第二冊, pp. 3-8
- 村石眞澄・久保純子・橋本真紀夫 1994「東京低地北部毛長川周辺の微地形と古墳時代の古環境」『日本第四紀講演要旨集』24, P4, pp.178-179
- 村石眞澄 1997a「微地形分類に基づいた古環境復元の試み」『山梨県考古学協会誌』第9号, pp. 70-83
- 村石眞澄 1997b「地理的環境」『伊興遺跡』下水道敷設工事に伴う発掘調査 足立区伊興遺跡調査会, pp. 17-19
- 村石眞澄・橋本真紀夫・辻本裕也 1999「伊興遺跡の立地環境と古環境について」『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 295-306
- 森朋久・三ヶ島誠次男 1999「『伊興村明細帳』にみる伊興地区古墳群の地理的位置」『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 265-268
- 山田昌久・大崎美鈴 1999「毛長川流域の木製品について」『毛長川の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会, pp. 187-219

小論は「文部省 平成7年度科学研究費補助金(奨励研究B) 村石眞澄 課題番号 07904040『空中写真を利用した地形分類に基づいた古環境復元と遺跡立地』」の成果に基づいている。

(山梨県埋蔵文化財センター, 国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(2003年1月6日受理, 2003年7月18日審査終了)

The Geomorphological Environment and the Location of Archaeological Sites in the Vicinity of the Kenaga River in the Northern Tokyo Lowlands

MURAISHI Masumi

During the period of my involvement in the excavation survey in the northern part of Adachi-Ward involving the Ikou Site near the Kenaga River, I drew a micro-Geomorphological Land Classification Map of this region. The method adopted for this Micro-geomorphological classification entailed the interpretation of aerial photographs (S=1:20,000) taken by the US military and basing classifications on the following criteria: difference in relative elevation, water content in the ground and land use. When making these classifications I also referred to other materials, including observational findings of stratum sedimentation obtained from excavation and topographic maps compiled between about 1906 and 1937.

These classifications made it possible to discover old land forms that had been filled in. I also investigated vegetation and the sedimentary environment by employing natural science analysis that included pollen fossils and diatom fossils.

In addition to gaining an understanding of the natural environment surrounding the site, I undertook a general survey of the evidence that had been discovered as a result of the excavation and documents from the Middle Ages and Early Modern Period. As a result, I identified the following five stages and produced impressionistic maps of the landscape for the natural environment and the process of change in people's lives in the area surrounding Kenaga River based around the Ikou Site.

1. Late Jomon Period to Early Final Jomon

Although most of the land in this area was submerged in the sea at the culmination of the Holocene transgression, tidal flats gradually emerged and land was formed. Although Jomon people did not live here, they visited temporarily and left behind earthenware.

2. Late Final Jomon to Yayoi Period

The Kenaga River became the main river of the old Tone-and-Ara River, forming a large river course and low ridges. There are few traces of human activity.

3. End of the Yayoi Period to the Kofun Period

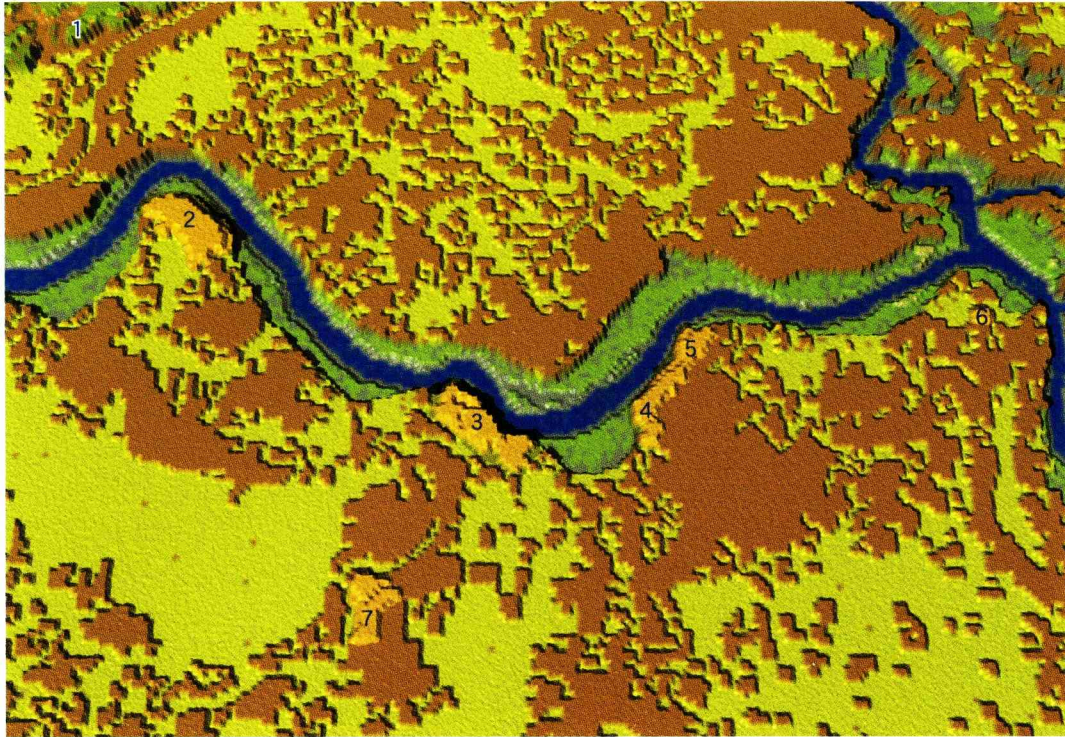
The old Tone-and-Ara River shifted east so that the Kenaga River was no longer a huge river. The basic topography that has lasted up to today comprising of the low ridges and the former river course was more or less formed. People came to live there. The Ikou Site underwent considerable development as a specific site for religious rites related to water transportation.

4. Nara Period to Early Heian Period

Infilling of the old river course of the Kenaga River progressed. Although the Ikou Site existed as a place for conducting religious rites and as a government office, there is a decrease in the amount of remains and artifacts from this time.

5. Middle Ages

The infilling of the old river course of the Kenaga River progressed. There are fewer remains and artifacts from the Ikou Site dating from this period and the center of sites from this period are to be found some distance from the side of the Kenaga River, spelling the end of their role as bases for water transportation.



- | | | | |
|---------|------------|------------|-----------|
| 1：高稲荷古墳 | 2：舎人遺跡 | 3：伊興遺跡 | 4：法華寺境内遺跡 |
| 5：花畑遺跡 | 6：大鷲神社境内遺跡 | 7：若宮八幡神社遺跡 | |

図11 毛長川周辺鳥瞰図（毛長川流路は現在のもの）



図12 縄文時代後期の伊興遺跡周辺景観印象図 干潟の間を縫うようにクリーク（小河川）が発達した。

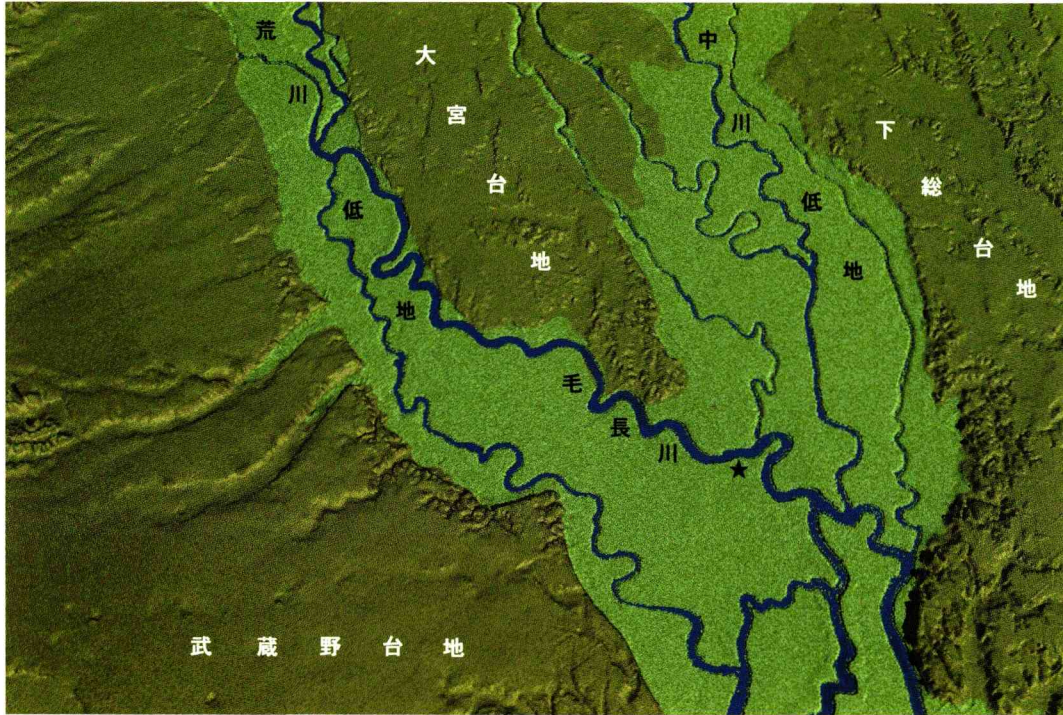


図 13 弥生時代の東京低地景観印象図 毛長川は古利根川・古荒川の本流となり微高地が形成された。

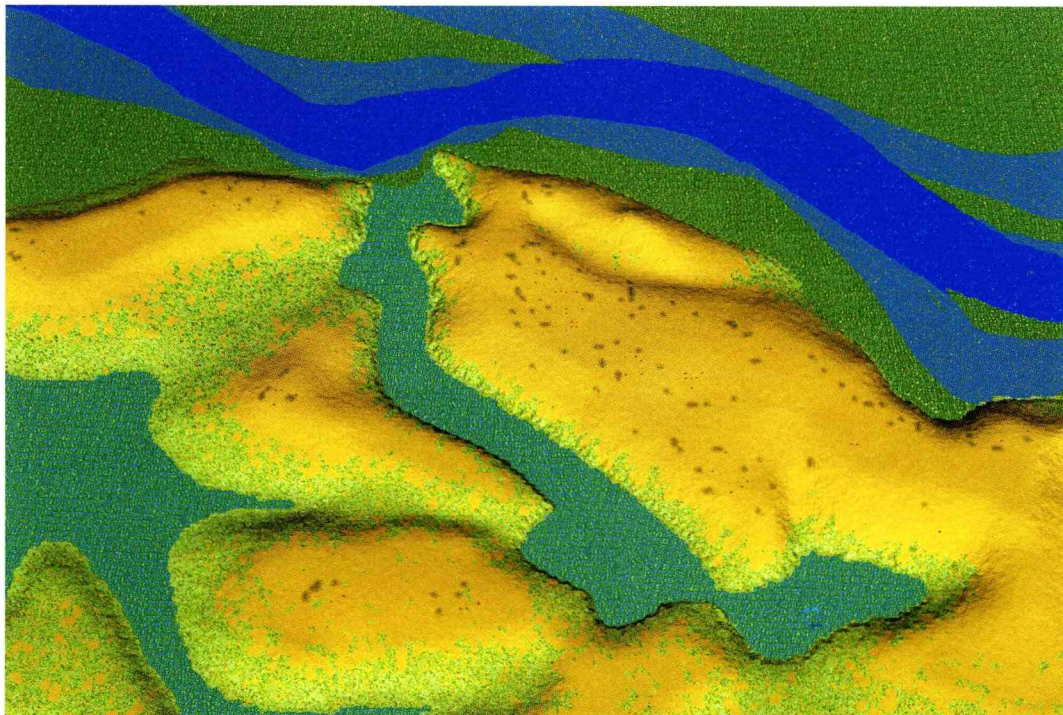


図 14 古墳時代の伊興遺跡周辺景観印象図 微高地を取り巻く低地には比較的安定した沼沢地ないし池沼の水域が広がっていた。

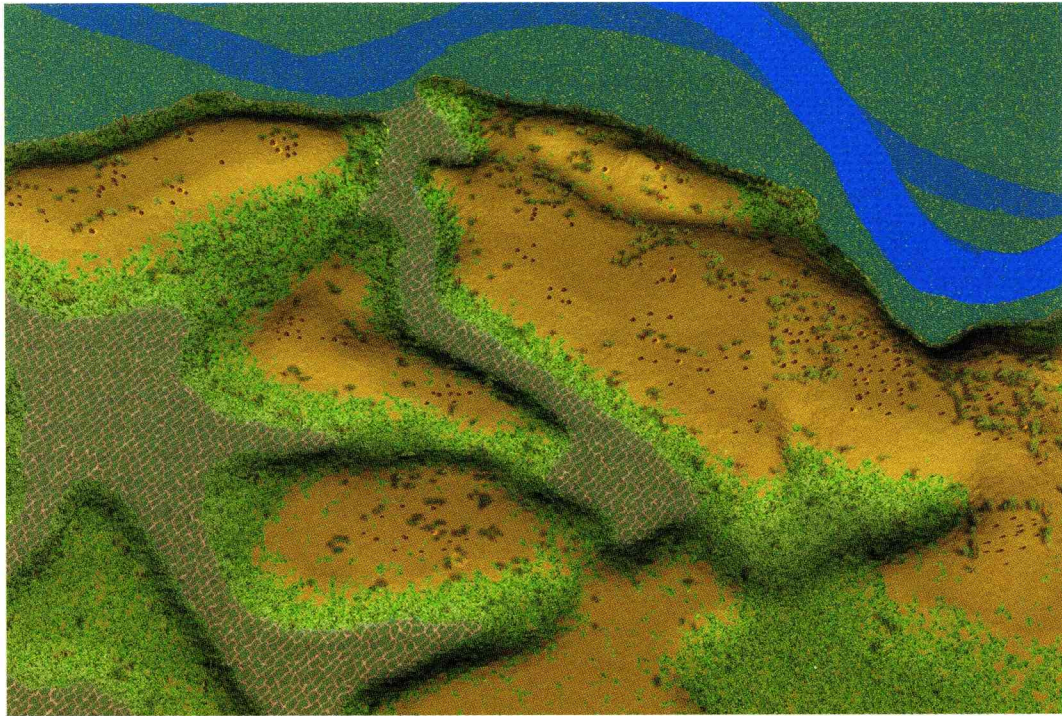


図 15 奈良・平安時代の伊興遺跡周辺景観印象図 低地は富栄養沼沢地のような環境となり水田がつけられた。

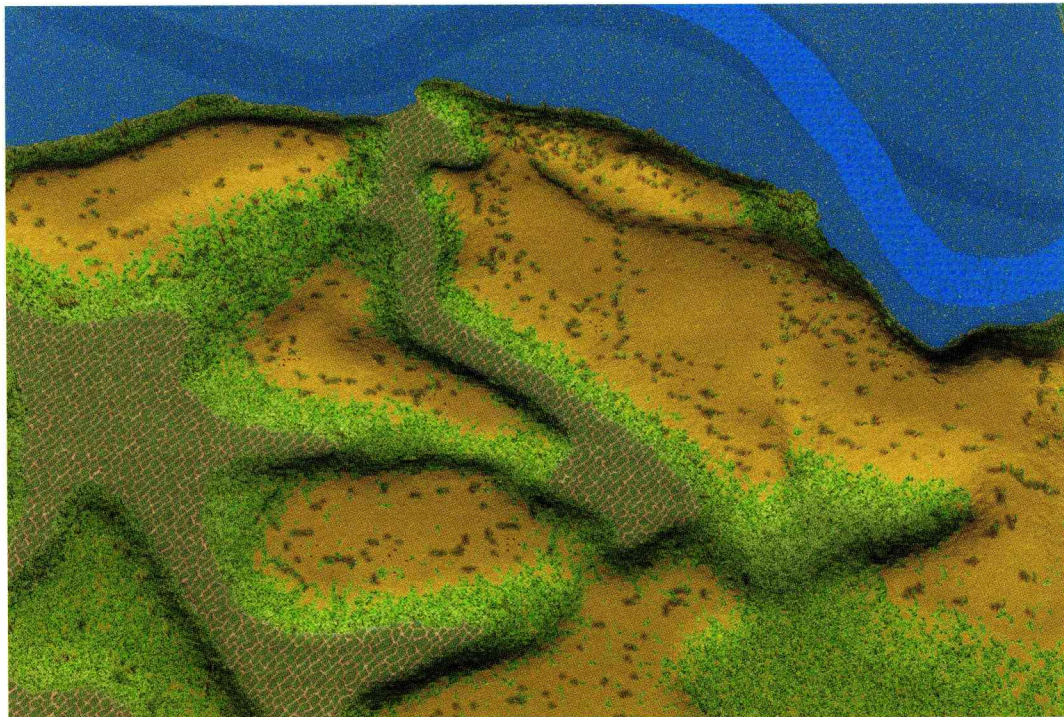


図 16 中世の伊興遺跡周辺景観印象図 毛長川沿いは葬送を執り行う非日常的な場所となり集落の中心は南へ遷っていった。